

Costume and Textile

No. 10

服飾文化学会会報

2005年10月

第6回総会・大会の報告

服飾文化学会第6回総会・大会は、2005年5月21日(土)・22日(日)に、新校舎となった共立女子大学神田一ツ橋キャンパス本館を会場として開催された。新会員となられた方々の参加も多く、93名の申込者があり、設備の整った新しい校舎において、盛会のうちにプログラムが進行した。

伊藤紀之実行委員長が進行を務め、石井とめ子会長の開会の挨拶に続き、開催校である共立女子大学を代表して、家政学部長小林茂雄氏のご挨拶を頂戴したのち、以下のような内容で実施された。

1) 口頭発表

発表件数は、1日目6件、2日目3件、計9件であった。その内容は服装史・服飾美学・染織文化財の修復・被服心理学・リサイクル関連など、多岐に渡り、服飾文化学会に属する研究者の領域の広さを改めて認識した。また、異なる立場の研究

者が意見を交える意義と発展性も思慮することができた。

2) 作品展示発表

発表件数は11件で、口頭発表会場に隣接した会場において展示された。作品についてのショートスピーチは、2日目の口頭発表終了後、11時25分まで行われた。コンピュータによる織やパターンの作成という今日的な技術を活かした作品から、とうもろこし繊維素材という新素材を用いた作品、また、絞、カッティング、モラなど伝統的技法を新たな提案としたもの、色彩および平面と立体構成の実験的作品など、この学会の特色でもある実作品によるプレゼンテーションの魅力が発揮された内容だった。限られた時間だったが、活発な質疑が交わされた。



第6回総会・大会口頭発表会場

3) 総会

本総会・大会の実行委員長 伊藤紀之氏の開会の辞に始まった第6回総会は、石井とめ子会長の挨拶に続き、伊藤一郎氏を議長に選出して議事に入った。報告事項として、昨年度事業報告・同決算報告と監査報告があり、審議事項では、今年度事業計画案・同予算案が承認された。



特別講演 石井美恵氏
松方コレクション17世紀タピスリーの修復

4) 特別講演

1日目の研究発表後に二つの講演が行われた。
講師：石井美恵氏（元メトロポリタン美術館染織品保存修復部特別研究員，共立女子大学大学院博士課程在学中）

演題：松方コレクション17世紀タピスリーの修復
松方幸次郎氏が収集したタピスリー6点が，2002年国立西洋美術館に寄贈され，2003年の展示準備のため，その状況調査のうち1点「姉たちに贈り物をするプシュケ」(17世紀後半，オービュソン製)の修復に石井氏は携わられた。その修復工程を紹介され，染織品修復の考え方を述べられた。

プシュケのタピスリーは有楽町糖業会館に40年近くも掛けられていたものであり，以前に日本

で修理されたことが判明した。修理に用いられた糊で繊維が固化した本品は，経験者が不足し施設もない日本では洗浄が困難であり，最終的にはニューヨークに輸送して洗浄を行った。世界の財産である染織品保存修復の倫理観や日本の研究教育課題を提示してくださった貴重なご講演であった。



特別講演 長崎巖氏

講師：長崎巖氏（共立女子大学教授）

演題：日本のきもの歴史

—小袖・きもの概要—

現在のきもの原型は「小袖」と呼ばれる衣服であると言われている。なぜ「小袖」=「きもの」となったのか疑問に感じてこられたことを論説された。平安から明治時代まで，小袖と対極にある大袖の出現と対比して，公家・武家・庶民あるいは町人という社会的身分で図式化し，どのように移行してきたかを示された。また，なぜ袖という部分だけで衣服の名を代表させたのか，袖にどのような意味があるのか，さらには，小袖がなぜ「きもの」という言葉に置き換えられるようになったかを考察された。小袖という形態が定着した後，その素材・模様・加飾技法が身分や階層による好みや美意識の違いを反映したことにも触れられた。何気なく見過ごしがちな箇所に視点を置かれ，それらを探究する重要性を教えてくださいましたご講演であった。



展示発表会場

5) 懇親会

本館4階の学生食堂を会場に開催され、参加者は55名であった。蔵方宏昌理事が司会を担当。乾杯の挨拶ののち、歓談の合間に、開催校実行委員の紹介、夏期セミナー担当からの報告・連絡事項なども交えながら終始和やかに会が進行した。特別講演の講師を囲んでの歓談や発表者との交流など、瞬く間に時が過ぎ、名残惜しくも会員一同益々の学会の発展を祈り閉会した。

6) 見学会

2日目の13時から15時まで、六本木一丁目にある泉屋博古館分館にて見学会が実施された。両角かほる学芸員より、「泉屋博古館」の名称の由来と収蔵する住友家の旧蔵品の概要をうかがった後、「特別展 共立女子学園 華麗なる装いの世界—江戸・明治・大正—」展を両角氏の説明を受けながら見学した。前日の長崎巖氏のご講演内容とも関連があり、一つ一つの小袖の意匠や技法、構成や着装、身分との関連など、参加者が互いに話題を交わしながら、充実した鑑賞の時間を過ごすことができた。参加者は62名と大変盛況であった。

(文責 玉田真紀, 野澤久美子)

プログラム

★5月21日(土)

口頭発表	
13:40	◆座長 鍛島 康子 A-1 東北地方における衣服のリサイクルの課題と一提案 尚綱学院大学女子短期大学部 玉田 真紀 A-2 ジャポニズムの中のシノワズリー—19世紀後半ヨーロッパを中心に— 株式会社ファイブフォックス ○潘 琦 共立女子大学 伊藤 紀之 野澤久美子
	◆座長 小笠原 小枝 A-3 共立女子学園所蔵狸々緋羅紗地陣羽織について 共立女子大学大学院 ○福岡 裕子 共立女子大学 齊藤 昌子 A-4 人形芸術・様式の展開とその周辺 (IV) —郷土玩具の色彩表現を中心として— 山野美容芸術短期大学 澤村 英子
	◆座長 常見 美紀子 A-5 17世紀フランスの礼儀作法書に見られる服飾情報 お茶の水女子大学 内村 理奈 A-6 男性サン=シモン主義者の服装における色の象徴性 お茶の水女子大学大学院 新實 五穂
15:10	
15:20	特別講演1 「松方コレクション,17世紀のタピスリー修復について」 石井 美恵氏 (元メトロポリタン美術館 染織品保存修復部特別研究員 共立女子大学大学院博士後期課程在学中)
16:00	2 「日本のきもの歴史 —小袖・きもの概要—」 長崎 巖氏 (共立女子大学教授)
17:00	
17:10	総会
17:40	
18:00	
18:30	懇親会 <共立女子大学 神田一ツ橋キャンパス本館 4階 学生食堂>
19:30	

★5月22日(日)

口頭発表	
9:30	◆座長 杉田 洋子 B-1 属性の違いによる着装基準の相異 鎌倉女子大学 長田美智子 B-2 育児観と子供服の日韓比較 —1920~30年代を中心に— 奈良女子大学大学院 黄 貞允 B-3 バッスルドレスの着心地について 文化女子大学 塚本 和子
10:15	

10:30

展 示 発 表	
◆座長 飯塚 弘子	
C-1 最新鋭 コンピュータージャカード手織機による —緻密な柄織II— 女子美術大学 佐久間恭子	
C-2 outerspace 岐阜市立女子短期大学 伊藤 陽子	
C-3 3DCGで作るイメージ衣装から実物作品へ —PCソフトによる二次元パターン展開— 名古屋学芸大学短期大学部 ○加藤 素子 CSC研究会 五十嵐かつ代	
◆座長 鷹司 繪子	
C-4 とうもろこし繊維の特性を生かしたウェディングドレス 大妻女子大学 大網美代子	
C-5 カッティングを用いたウェディングドレス 共立女子大学大学院 金 美淑 共立女子大学 伊藤 紀之 野澤久美子	
C-6 北方民族の服飾からイメージしたドレスI —アイヌの衣服文様から— 浅井学園大学短期大学部 泉山 幸代	

11:25

◆座長 岡田 宣世	
C-7 再利用の布をデザインポイントにしたドレス —異素材の布使いによるイメージ変化— 和洋女子大学 榎本 春栄	
C-8 二枚袖の展開 園田学園女子大学短期大学部 梶間 充子	
C-9 ドレスのモチーフの展開によるイメージ 東京家政学院短期大学 高野 美栄	
◆座長 池田 節子	
C-10 重なるの構成 —素材の表情を引き出す衣服— 滋賀県立大学 森下あおい	
C-11 「モラ」手法を用いたゆかた製作 東京家政学院大学 松本 幸子	

13:00

見 学 会	
泉屋博古館分館 「特別展 共立女子学園コレクション 華麗なる装いの世界 —江戸・明治・大正—」展 ギャラリートーク：学芸員 両角かほる 氏	

15:00

研究例会の報告

日時 2005年6月25日(土)

14:00~17:30

会場 大妻女子大学 千代田校舎

講師 古代織物, 編組作家
酒井美智代氏

内容 「織物の原点からみた文化・技術」

1. 実技 いざり機で織る
2. 講演 繊維植物“^{からむし}苧”について

研究例会当日は、梅雨のころとは思えぬ厳しい暑さだったが、25名の参加者があった。

講師の酒井美智代氏は、会津・若松市で実施の2001(平成13)年度夏期セミナーに於いて、講演「修復・復元に用いる素材」「からむしの布を織る」二題と、実演「糸を績む」をご担当下さっている。

氏のふるさと福島県昭和村は、かつて陸の孤島といわれた。今日でも交通の便が悪く、近代化の波にダイレクトにのみこまれることなく、自然の

恩恵の中に日々の暮らしがある。村の学生産は、国の無形文化財である越後上布の原料供給という必需性から、2001年に国から選定保存技術に指定された。時代の変化に影響されることなく、自然と共生する生活の中で、氏は苧を植え、糸を績み、古代機で布を織りつづけられている。古来からの“苧織り”を継承される第一人者である。

1. 実技 いざり機で織る

まず、織準備として次の作業工程がある。

経のべ→箆通し→綾返し→機巻き

→機上げ→かけ糸かけ→あくとよせ

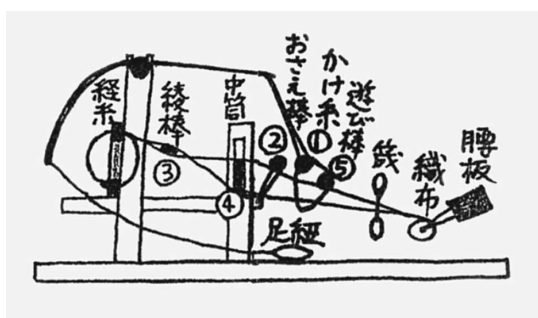
機ごしらえの順序は、以下である。

- ① かけ糸を足ひき棒の先に結びつける。
- ② 経糸をおさえる棒に結びつける。
- ③ 先の綾棒を軽い平棒にかえ、紐を結んで上糸を囲む。
- ④ 手前の綾棒を中づち板にかえ、所定の位置

にはめる。

- ⑤ かけ糸に調子をとるための遊び棒を通す。

下図は、機ごしらえ終了時の位置関係を示す。いざり機の機ごしらえは、マジックをみる如く興味津々、アツという間に組み立てられた。かけ糸かけや機織りの実技指導をしていただき、トライされた方々にとっては、貴重な体験となったであろう。見る側も引き込まれて、手や腰がリズムを刻んでいた。



2. 講演 繊維植物“苧”について

講演の主旨は、

- ① 苧という素材
- ② 古代織物の中心だった苧
- ③ 上布として残された苧
- ④ 廃れていった苧
- ⑤ 消えていく苧の技術 などであった。

苧は麻の一種でアジア原産、イラクサ科の宿根性多年草である。繊維原料として太古の時代から大麻とともに用いられた。別名支那麻(チャイナ・グラス)または、一般的にはラミーという。インド、中国、マレーなどで多く産する。

苧栽培の工程は、次の通りである。

- ① 畑こしらえ (焼畑準備)
- ② 苧焼き
- ③ 施肥
- ④ 敷藁
- ⑤ 垣作り

- ⑥ 苧とり

土用のころが刈り取りの目安日である。

刈り取り日によっては、品質に差異が生じる。

- ⑦ 刈掛け

- ⑧ 苧ひき

ひいた苧は陰干しをし、百匁単位に束ねる。

150匁の苧が上布1反になる。

栽培は困難の極みであり、畑の管理いかんでは野生化してしまい、良質の苧には、もはや戻らないという。



機織の実技 酒井氏

講演に加えて、各種繊維植物、用具類、着尺地などの実物資料に触れることができ、織物の原点を一層身近に感じとれた。竹製の箴目の密さに驚嘆し、その技術力を押し量り、煮苧糸の試みには、新たな織文化への挑戦をみた。氏の創作活動は、真に精力的であり、情熱は、スゴイの一言につきる。

さらに平成13年度日本民藝館展に「苧編み袋」が入賞されるなど、造形作品としての評価も高い。また、仕事の傍らで綴られた「手織り通信」は、この度『山に生きる 苧の里から送る「手織り通信」の十年』という書名で、大河書房より出版の運びとなった。

酒井美智代氏の益々のご活躍を期待する。

研究例会実施に当たり、大妻女子大学に、ご尽力を賜った関係各位に謝意を表する。

(文責 田中美智)

会計報告

① 服飾文化学会平成16年度(2004)収支決算報告
(H16.4.1~17.3.31)

(単位:円)

費目	予算	決算	備考
収入			
会費収入	900,000	978,000	@6,000×156件
入会金収入	15,000	12,500	@3,000×14件
年間購読料収入	36,000	42,000	@1,000×8件
学会誌掲載料等	400,000	705,680	@500×9件
前年度繰越金	119,527	119,527	@3,000×14件
その他の収入	-	8	利子
計	1,470,527	1,857,715	
支出			
経費			
1)総会運営費	100,000	100,000	
2)学会誌発行費	800,000	1,389,260	
3)通信費	50,000	103,570	
4)印刷費	180,000	188,540	会報8号,9号
5)事務用品費	10,000	22,836	
6)会議費	50,000	38,517	
7)交通費	10,000	0	
8)雑費	10,000	9,632	
事業費			
1)事業費A	30,000	48,690	研究例会
2)事業費B	100,000	96,039	論文発表会
広報費	20,000	5,150	
予備費	110,527	15,300	
次年度繰越金	-	-159,819	
計	1,470,527	1,857,715	

③ 服飾文化学会 平成17年度(2005)収支予算
(H17.4.1~18.3.31)

(単位:円)

費目	予算	決算	備考
収入			
会費収入	900,000	900,000	
入会金収入	15,000	15,000	
年間購読料収入	36,000	36,000	
学会誌掲載料等	600,000	400,000	
前年度繰越金	-159,819	119,527	
その他の収入	-	-	
計	1,391,181	1,470,527	
支出			
経費			
1)総会運営費	100,000	100,000	
2)学会誌発行費	800,000	800,000	
3)通信費	50,000	50,000	
4)印刷費	180,000	180,000	
5)事務用品費	10,000	10,000	
6)会議費	50,000	50,000	
7)交通費	10,000	10,000	
8)雑費	10,000	10,000	
事業費			
1)事業費A	30,000	30,000	研究例会
2)事業費B	100,000	100,000	論文発表会
広報費	20,000	20,000	
予備費	31,181	110,527	
計	1,391,181	1,470,527	

② 特別会計収支経過報告

	2005年4月1日現在	支出	残高
○名簿作成費(大会余剰金)	212,917円	76,361円	136,556円
○ホームページ関係費(夏期セミナー余剰金)	1,255,515円	338,720円	916,795円

*****お知らせ*****

■役員改選について

本学会役員は、2005年度末をもって2年間の任期が満了となりますので、新たな役員選出のために選挙を行います。

今秋には選挙管理委員会を発足し、投票は先回同様に郵送で行います。

会員の皆様には、よろしくご協力下さいます様お願いいたします。

■2005(平成17)年度 論文発表会

開催日 2006(平成18)年3月4日(土)

会場 日本女子大学

東京都文京区目白台2-8-1

※詳細は追ってお知らせいたします。

*****会員からのお知らせ*****

■『きものと裂のことば案内』 長崎 巖 著
東京 小学館 2005年4月発行 159p A5
価格1,890円(税込)

■『生活文化の愉しみ—こころ・もの・からだスタイル』 岩崎雅美・上野邦一 編
京都 昭和堂 2005年5月発行 256p A5
価格2,730円(税込)

会報 No.10: 2005(平成17)年10月発行
編集発行人: 服飾文化学会
事務局: 〒102-8357 東京都千代田区三番町12
大妻女子大学第三被服意匠学研究室
TEL/FAX: 03-5275-6029
<http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp/>